

谷口智彦著「日本の立ち位置がわかる 国際情勢のレッスン—パスワードで世界を読む—」PHP 研究所、2010年8月9日刊を読む

## オバマ大統領就任演説とスピーチライティング

### 1. 読み上げる練習に2時間半かけたオバマ

- (1) オバマ氏は国内外に向け、そのことを強烈に印象づけたかったであろう。事前の練習が行き届いていた証拠に、約30分の演説中、舌を噛んで言い淀んだのは1箇所のみ。あとは、声調を自在に操作してみせた。
- (2) プロンプターに流れるテキストを見ながら読み上げる練習を、5回くらいしておかないとあままで流暢に読めない。150分、つまり2時間半は朗読の予行演習に費やしたと想像しておく。
- (3) そのような努力を、払うにふさわしい努力と思うプロフェッショナリズムないし職人魂が、米国にあって、日本にはない。

### 2. 日本にプロは皆無

- (1) 我が国にない証拠として最たるものとは、外務省や財務省など主要官庁においては無論のこと、総理官邸にすら、専門のスピーチライターが一人としていないという事実である。
- (2) このようなスピーチを書くプロに必要な第一条件とは、読み上げ主である指導者になりきる力だ。
- (3) それは口癖のあれこれを模倣してみせ、口調すら真似ることのできる能力と、一応別物である。
- (4) ただしスピーチとはまず第一に読み上げられるものであるから、読み手の息つき能力や特徴的アクセント、滑舌度を弁えておかないといけない。書き手自ら声に出し、読み上げつつ書くものがスピーチだ。その場合、読み手の模倣に長けていたら、それだけ自然なものになるだろう。
- (5) しかし「なりきる」力とは、もっぱら目線に関しての話である。大統領が読む演説なら、大統領になったつもりで、大統領の目線を我が物としつつ書かなければならない。「私」という主語によって語る主体性を、獲得しなくてはならない。

### 3. 誰がスピーチライターになれる

- (1) オバマ・スピーチが典型的に示していたように、指導者の演説とは、聞く側に命を吹き込む力を持つものでなくてはならない。
- (2) このとき、必要になる能力、資格は2つ。1つは書き直しに次ぐ書き直しをなんとも思わない強靱な精神力と、幾夜もの徹夜をものともしない頑健な体力である。
- (3) もう一つは、最終的にそのスピーチを読んでもくれるクライアント＝指導者の、信頼を勝ち得て

いることだ。最後に必ず、その指導者の威光を借りつつ、有象無象のコメントをはねのけねばならない段階がくるからである。

(4) 米国ではどうか。大統領の就任演説を書くなどは、スピーチライター最高の誉れである。しかし、彼ないし彼女を頂点とするスピーチライターというプロフェッショナルたちは、夥しい数を数える。

(5) 連邦政府が募集職種を説明しているサイトが参考になる。スピーチライターという職業が、数ある専門職の1つとして明確に位置づけられていることと、スピーチライターたるもの、どんな資質の持ち主でなくてはならないかが書いてある。

(6) 日本もここまで行ってほしいと思うが、多分無理だろう、自分の乏しい見聞と経験によれば。

(7) 最も重要なのは、没我の能力と、徹宵三晩に及んでなおやれるという体力だ。担当部局にオーナーシップを感じさせないと、政策スピーチは宙に浮く。大臣や総理の読み合わせ日程から逆算していくと、徹夜に徹夜を重ねないと間に合わなくなる。年寄りにはできない。

P204 ~ 209

#### [コメント]

安倍首相の外交に関する演説が光っているのは、日本にもスピーチライターが出現したためではないのか。「整理、整頓」など日本が世界に誇る改善活動である「5S」を紹介して絶賛を浴びた安倍首相のアフリカでの演説など、異才を放っているスピーチが多い。現在の日本の首相のスピーチライターを高く評価したい。

— 2014年1月31日 林 明夫記 —